

英文校閲の実際 第13話

——英文における文章の主体の首尾一貫性の重視について②

前回（第12話）に引き続き、文章の主体の首尾一貫性の維持の問題がいくつも登場します。

文例29 : Acute Oral Gavage Escalating Dose Toxicity Study in Dogs (3/8)

Summary より

(校閲前原文) : ⑧ In blood chemistry, 1 male showed increases in ALT, AST, ALP, CK and LDH 1 day after dosing of 100 and 1000 mg/kg, ⑨ and in this animal, total bilirubin also increased 1 day after the dosing of 1000 mg/kg. ⑩ The values in AST, CK, LDH and total bilirubin had returned to be normal within 7 days after the final dosing.

(和文) : ⑧血液生化学検査では、雄の1例が100及び1000 mg/kg投与の1日後にALT、AST、ALP、CK及びLDHの増加を示し、⑨さらにこの動物では、1000 mg/kg投与の1日後にtotal bilirubinも増加した。⑩AST、CK、LDH及びtotal bilirubinの値は、最終投与の7日後までには正常に戻った。

(校閲後) : ⑧ In the blood chemistry analyses, 1 male showed increases in ALT, AST, ALP, CK and LDH 1 day after receiving 100 and 1000 mg/kg, ⑨ and in this animal, total bilirubin was also increased 1 day after the dose of 1000 mg/kg. ⑩ The levels of AST, CK, LDH and total bilirubin returned to normal levels within 7 days after the final dose.

(解説) ⑧の“In blood chemistry,”が“In the blood chemistry analyses,”に修正されました。理由は、複数形の“analyses”を加えた方が論理的には正しいからです。しかし、2つの理由からこの修正は必要がなかったと考えます。1つは“In blood chemistry,”のような、「In + 検査項目」の書き出しは従来から普通に使われてきたこと、もう1つは、修正後の文章が世間では通用していないと考えられることです。根拠はGoogle USAによる以下の検索結果です：

A. (SDによる原文) “In blood chemistry,” のヒット数： 325,000件

B. (校閲者の修正文) “In the blood chemistry analyses,” のヒット数：【検索不能】

C. (自動代替文) “In the blood chemistry analysis,” のヒット数：19,000件

上記Bの【検索不能】と、Cの「自動代替文」の意味は、Bの文章でフレーズ検索したとき、“analyses”が単数形“analysis”に自動変換され、Cの自動代替文で検索が行われたことを指しています。

上記の検索結果から、フレーズA~Cのうち、世間に最もよく通用しているのはSDによる原文Aであり、次がGoogleによる自動代替文Cで、校閲者による修正文Bは世間に通用していないと考えられます。したがって、校閲者によるAからBへの修正は必要がなかったと考えます。

⑧の原文の“1 day after the dosing”が“1 day after receiving”に修正されました。理由は、⑧がイヌを主体とする文章であるのに対し、“dosing”（投薬すること）はヒトの行為なので、校閲者は“dosing”をイヌが主体の“receiving”（投薬を受けること）に置き換えることにより、

イヌが主体の文章⑧の首尾一貫性を維持したと考えられます。

⑨の“total bilirubin also increased”が“total bilirubin was also increased”に修正されました。「増加した」という場合の“increased”と“was increased”の使い分けは、第7話の主題であり、文例14の解説で詳細に説明しましたので、ここでは結論だけを書きますが、目に見える増加には自動詞“increased”を使い、2つの数値の比較だけで一方を増加したという場合は、形容詞の“was increased”を使います。

⑩の原文の過去完了形“had returned”が、単純過去形“returned”に修正されました。理由は、過去完了形が過去の特定の1時点に注目し、その時点までに完了していたことを“by+時点”で表現する形式であるのに対し、本ケースは“by”を使わず、“within 7 days”（7日以内に）と、時間的に幅がある表現をしているので、単純過去形を使えばよいケースだからです。

⑩の原文の“returned to be normal”が、“returned to normal levels”に修正されました。理由は、主語が“values”（数値）なので、これが元に戻ったという場合、“returned to be normal”（正常な状態に戻った）よりも、“returned to normal levels”（正常なレベルに戻った）の方が論理的に正しいからです。また、⑩の原文の最後の“after the final dosing”が“after the final dose”に修正されました。理由は2つあり、1つは毒性を論じる場合、投与という動作に重点を置く動名詞“dosing”よりも、投与量に重点を置く名詞“dose”が適切であること、もう1つは、修正後の文章⑨に“dose”を使っており、それとの首尾一貫性を維持するためです。

文例30 : Acute Oral Gavage Escalating Dose Toxicity Study in Dogs (4 / 8)

Summary より

(校閲前原文) : ⑪ The values in ALT and ALP showed the tendency toward recovery, however, they were still high at 14 days after the final dosing. ⑫ Furthermore, slight increase in glucose was noted in 1 female transiently 1 day after the dosing of 1000 mg/kg.

(和文) : ⑪ ALT 及び ALP の値は、回復傾向を示したが、最終投与の14日後でもなお高かった。⑫さらに、1000 mg/kg 投与の1日後に、雌の1例に軽度のグルコースの増加が一過性に認められた。

(校閲後) : ⑪ The ALT and ALP values showed a tendency toward recovery, however, they were still high at 14 days after the final dose. ⑫ In addition, a slight increase in glucose was noted transiently in 1 female 1 day after receiving 1000 mg/kg.

(解説) ⑪の“The values in ALT and ALP”が“The ALT and ALP values”に修正されました。この修正は語順を変えて前置詞“in”を不要にただけですが、口調が良くなりました。

⑪の“showed the tendency toward recovery”の“the”が“a”に修正されました。理由は、“tendency”が可算名詞であり、程度が異なる複数の回復傾向があるうちの1つだからです。

⑪の最後の“final dosing”が“final dose”に修正されました。理由は、上の文例29の⑩の解説と同じで、要は毒性を論じる場合、投与量に重点を置く“dose”がより適切であること、及びその前の⑨・⑩に“dose”を使っているため、それらとの首尾一貫性の維持のためです。

⑫の“Furthermore,”は、文語的過ぎるので“In addition,”（加えて）に修正されました。

また、“transiently”（一過性に）が動詞の直後に移されました。理由はそこが副詞として自然な位置だからです。更に、⑫の最後の“1 day after the dosing of”が、“1 day after receiving”に修正されました。理由は、上の文例 29 の⑧の説明と同じなので結論のみ書きますが、イヌが主体の“receiving”に置き換えて、イヌが主体の文章⑫としての首尾一貫性を維持するためです。

文例 3 1 : Acute Oral Gavage Escalating Dose Toxicity Study in Dogs (5 / 8)

Summary より

(校閲前原文) : ⑬ To clarify the cause of the blood chemical changes noted in 1 male, necropsy and/or histopathological examination were conducted for all treatment animals 14 days after the dosing of 1000 mg/kg. ⑭ Neither gross nor histopathological (for liver and skeletal muscle) abnormalities were noted in this male, ⑮ however, in another male, multiple yellowish brown foci in the lungs were noted at necropsy and were identified as intra-alveolar foam cell infiltration in the subpleural area by the histopathological examination.

(和文) : ⑬雄の 1 例に認められた血液生化学的変化の原因を明らかにするため、1000 mg/kg 投与の 14 日後に、投薬を受けた全ての動物について、剖検及び／あるいは病理組織学的検査を実施した。⑭(肝臓及び骨格筋) 肉眼的観察あるいは病理組織学的検査のいずれにおいても、この雄動物に異常は認められなかった。⑮しかし、剖検時に、もう 1 例の雄の肺の肺胞内に、多発性の黄褐色の病巣が認められ、病理組織学的検査において、胸膜下の肺胞内に泡沫細胞の浸潤が認められた。

(校閲後) : ⑬ To clarify the cause of the blood chemical changes noted in 1 male, necropsy and/or histopathological examinations were conducted for all treated animals 14 days after dosing 1000 mg/kg. ⑭ Neither gross nor histopathological (for liver and skeletal muscle) abnormalities were noted in this male; ⑮ however, in another male multiple yellowish brown foci in the lungs were noted at necropsy and were identified as intra-alveolar foam cell infiltrations in the subpleural area by histopathological examinations.

(解説) ⑬の“examination”(検査)が、複数形“examinations”に修正されました。理由は、検査の種類が剖検と病理組織学的検査の 2 種類あり、検査対象動物も複数だからです。また、“all treatment animals”(全ての投与した動物)が“all treated animals”(全ての投与を受けた動物)に修正されました。理由は、⑬がイヌを主体とする文章であるのに対し、“treatment”(投薬)がヒトの行為なので、“treatment”を、動物が主体の“treated”(投薬を受けた)に置き換えることによって、動物が主体の文章⑬としての首尾一貫性を維持するためです。

原文⑭と⑮は、カンマで区切られた複文ですが、校閲者はカンマをセミコロンに修正しました。理由は、複文がカンマで区切られるのは前後の文章の主語が同一の場合など、関係が強い場合ですが、⑭と⑮は別の個体の所見なので、前後の文の独立性が高いことを示すための修正です。

⑮の原文の“foam cell infiltration”(泡沫細胞の浸潤)が“foam cell infiltrations”と、複数形に修正されました。理由は“multiple foci (多発性の病巣)と浸潤との数を一致させる

ためです。病巣とは泡沫細胞の浸潤場所なので、病巣 (foci) が複数なら、浸潤も複数です。

また、⑮の最後の“the histopathological examination”が複数形に修正されました。理由は、検査対象動物が複数だからです。検査が複数で、特定されていないので、“the”は不要です。

(馬屋原 宏)